4

木を学ぶ若者たち

森を活かす時代となった今、新しい木の文化を構築していくためには、それを担う若者たちの台頭が必要だ。ここでは、大学生が山村でのグループ制作を通じて森と木材の姿を学ぶ「木匠塾（もくしょうじゅく）」の活動と、基本的な木工技能を学び棟梁を目指す若者を育てる「東京建築カレッジ」の活動を紹介しながら、将来の日本の木の文化を担う若者像を探ってみる。

山村での体験で若者の顔つきが変わる

「木匠塾」の活動は、「大学の建築学科では木造建築教育がほとんどなされていない」ということから1991年、岐阜県の飛騨高山で関東の3大学が合同ゼミ合宿を行ったことに端を発する。それ以来年々参加校が増え、現在は6か所に分かれて、建築家の任意団体である建築フォーラムの支援のもと、それぞれの活動を展開している。

「例えば加子母木匠塾では、施主制度といって住民が施主さん、学生が設計者であり施工者となって、例えばガレージなどを地元の木材でつくります。川上村木匠塾では、学生が構内公共物などの制作を通じて、伐採から設計制作までの流れを体験しようという活動を行っています。このように各地で活動内容も運営のしかたも違いますが、地元の森を感じ、地元の木を使って地元に残るものをつくるという点で共通した活動です」と言うのは、木匠塾事務局代表で京都造形芸術大学環境デザイン学科副手の戸田都生男さん。戸田さん自身も、川上村木匠塾の参加経験者である。

大学の建築学科といっても、学内ではせいぜい小スケールの模型くらいしかつくることが出来ない。木匠塾の活動は、大学にとってみれば、学生が実際の木材を使って実寸大のものを制作することが出来るのが、大きな魅力となっている。また受け入れる町村にとっても、毎年若者がやってくることが、停滞している地元の林業や木材産業にとっての刺激となっている。

「学生のほとんどが、学校の単位が得られるからとか、木は温かいとか良いにおいがするとか、それくらいの感覚で参加しており、森林や木材の実体を知りたいという参加者はごくわずか。ところが活動を始めると、例えば林業家の、大事に育てきた木を大切に使って欲しいという気持ちなど、地元の木に携わる人たちの思いが伝わってくるんです。1週間も過ごせば、顔つきが変わってきますね。そして、木のことをもっと知りたいと思うようになるようです。ですから、参加者の4分の1はリピーターです」

卒業後も自分が制作したものを見に再訪する参加者は多く、受け入れ先の工務店等に就職する例も出てきているという。森林や木材を通じた、新しい人と人とのつながりが生まれ始めているのである。

「年々増えていく参加経験者が、木匠塾の財産です。社会に出た木

林業体験（川上村木匠塾）

制作風景（川上村木匠塾）

完成した藤棚の前で記念撮影（川上村木匠塾）